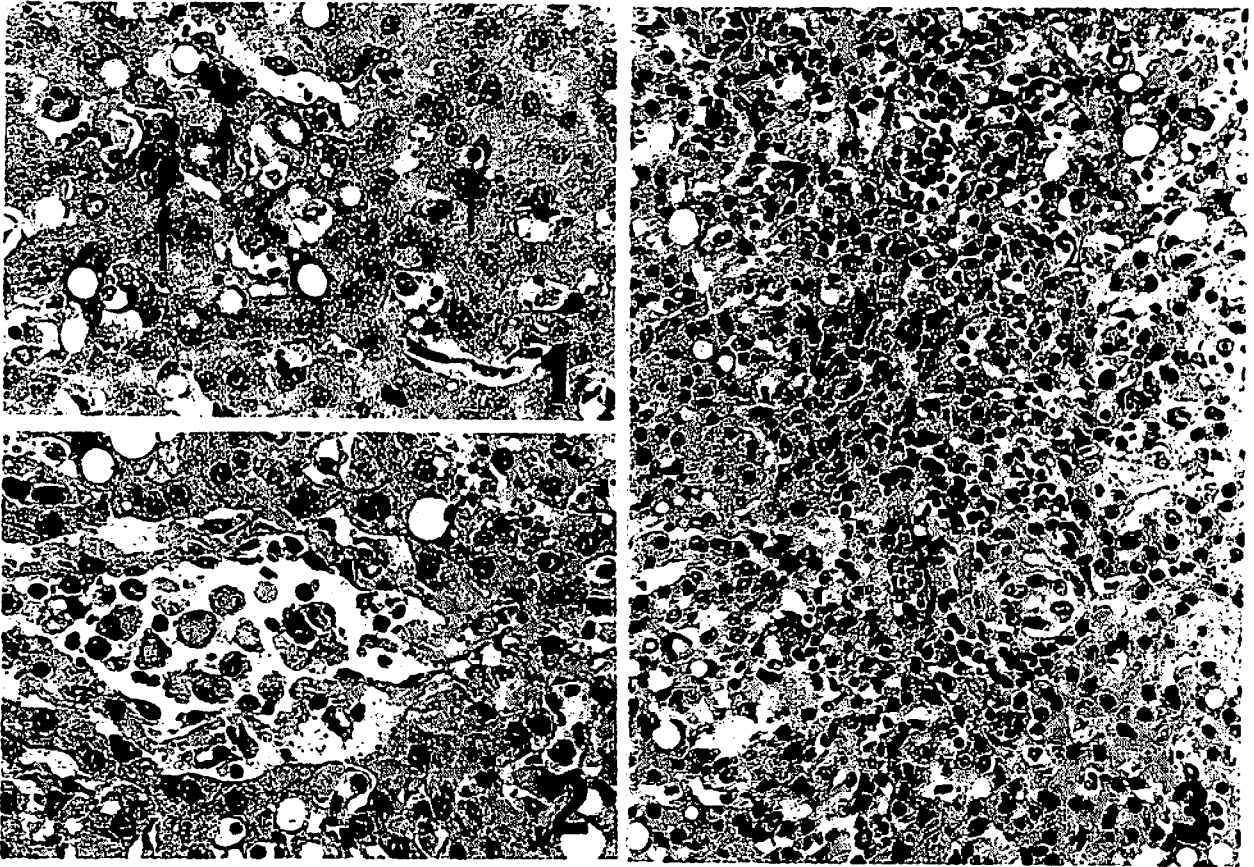


リスザルの肝臓

鳥取大学農学部家畜病理学教室出題 第23回獣医病理学研修会標本No.394



動物：リスザル，雌，年齢不詳（大腿骨骨端軟骨板消失，切歯の磨滅軽度）。

臨床事項：昭和56年5月，業者を介して輸入，鳥取市の某公園で飼育していた。飼料はさつまいも，果物が主体で，ほぼ週1回ビタミン剤を与えていた。生前，異常には気づかず，昭和57年10月27日昼頃死体を発見。

剖検所見：死体発見後約24時間で剖検。1) 削瘦および全身性貧血。2) 軽度の全身性黄疸。肝は大きさほぼ常で，汚穢黄土色調。3) 大腿骨骨髓淡赤色髓。4) 全身リンパ節の大きさほぼ常。脾リンパ濾胞不明瞭。5) 腎周囲の腹膜下にフィラリア成虫（北大・大林教授により *Dipetalonema* sp. と同定）4匹寄生。

肝の組織像：いずれの切出し部位においても病変はほぼ同様であった。提出標本の全域にわたってRESおよび肝細胞へのヘモジデリン沈着が目立っており，RES細胞には黄褐色ないし黄緑色調の大小滴状顆粒が混在していた。この色素は抗酸性（写真1の矢印，Ziel-Neelsen， $\times 370$ ）で，かつ背白い自家蛍光を發し，セロイド色素と思われた。リポフスチン沈着および胆栓子形成も軽度

に認められた。また，肝細胞の脂肪化と核の大小不同が目につく他，散在性孤在性ないし小巣状の肝細胞壊死（写真2，小葉中心部における肝細胞脱落H・E， $\times 370$ ）と反応性増殖性変化，すなわち，グリソン鞘を中心とする未分化細胞並びに胆管の増殖（写真3，H・E， $\times 250$ ），およびまれに小葉内線維化および肝細胞の再生性増殖小巣が観察された。リンパ球，形質細胞および好中球がグリソン鞘を中心に軽度に浸潤していたが，細胆管炎像はなかった。少数のマイクロフィラリアが類洞を遊泳し，その一部は少数のRES細胞に囲まれ，変性していた。

組織診断：組織診断は「リスザルの肝のヘモジデリンおよびセロイド沈着の著しい慢性炎症性変化」とした。本病変の病理発生は不明である。削瘦と貧血が著しいことなどから，本例が高度の栄養不良状態にあったことが推察された。本例の肝切片に対するHBs抗体による酵素抗体法（東京都・臨床研に依頼），オルセインおよびビクトリアブルー染色はいずれも陰性で，B型肝炎ウイルス関与の可能性は否定された。また，*Dipetalonema*のマイクロフィラリア性肝病変とは見なし得なかった。